



〈 連載(160) 〉

クルーズ客船「にっぽん丸」の サンタクルーズ



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授

池田良穂

現 在、日本のクルーズ客船としては、商船三井客船の「にっぽん丸」、日本クルーズ客船の「ぱしふいっくびいなす」、郵船クルーズの「飛鳥」、日本チャータークルーズの「ふじ丸」の4隻が稼働している。

このうち商船三井客船のクルーズ客船「にっぽん丸」だけは、同船の就航以来一度も乗る機会に恵まれなかった。港で停泊中の食事会に2回参加しているから、正確に言えば、実際の航海を楽しむ機会がなかった。同船が就航してから10年余りにもなるのだが、なかなか筆者とスケジュールが合わなかったのである。3ヶ月間もの世界一周クルーズには、現役の身での参加は不可能だし、たまにある関西発の国内ショートクルーズも、乗りたいとは思っても、いつも外せない用事があって諦め続けてきた。が、昨年末、ついにチャンスがサンタとともにやってきた。

12月になると、他の日本のクルーズ客船と同様に、同船も恒例のクリスマスクルーズを日本各地で実施する。「にっぽん丸」の場合には「サンタクルーズ」という名前

を付けている。去年のサンタクルーズは、日立を皮切りに、東京で2回、四日市で1回、名古屋で2回と行われ、最後のクルーズが神戸起点のクルーズとなっていた。基本的には、船内1泊の無寄港クルーズであるが、最後の神戸発着クルーズだけは2泊3日と他のサンタクルーズよりちょっと長い。

12月24日の夜に神戸を出港し、瀬戸内海の橋をいくつもくぐって周遊し、3日目の朝に神戸に戻るという瀬戸内海無寄港クルーズである。職場には1日半の休暇をだせば大丈夫だし、幸い授業にもかからない。さらに、1泊のクルーズはあまりにせわしないので、せめて2泊以上のクルーズを探していただけに、まさに筆者にとってはぴったりの企画であった。

乗 船当日、大学での仕事を終わらせて、女房の運転する車で神戸に向かった。大学から阪神高速湾岸線を使うと、わずか1時間で神戸のポートターミナルに到着する。ここには広い駐車場が完備されており、クルーズ期間中駐車させておいても結構安い

のでありがたい。特に重い荷物がある時には便利であり、筆者はドライブ&クルーズと勝手に呼んでいる。ターミナルには「にっぽん丸」が着岸し、乗船手続きが行われていた。チケットを出すと、ボーディングカードなどがもらえて、さっそく船内に案内される。

乗船してまずは船内の散策。5階キャビン区画の廊下の壁には、戦前の名船「あるぜんちな丸」と「ぶらじる丸」の船内イラストやメニューなどが飾ってある。また、カードルームには初代「にっぽん丸」（戦後建造の「あるぜんちな丸」がその前身）、2代目「にっぽん丸」（クルーズ客船「セブンシーズ」が前身）の模型があり、商船三井客船による客船運航の歴史と伝統を感じさせる。

筆者らの夕食は、2回目のテーブルで、19時半からのスタート。時間もたっぷりあったので、まずはバーで食前酒を楽しみ、そして19時に出港する際のプロムナードデッキでのボンボヤージュ・パーティに参加。スパークリングワイン等がサービスされ、陽気な音楽と美しい神戸の夜景に見送られての出港は、なかなか素晴らしいファーストインプレッションを与えてくれた。

いよいよレストランでのディナー。入り口でクルーが席にまで案内してくれる。同じ年代の2組の夫婦と同じテーブルを囲んだ。商船三井客船の伝統のある食事は、日本のクルーズ客船の中でもピカール。今回のクルーズでは、この美味しいディナーが2回も堪能できるのだから嬉しい。食事の時のワインも無料だ。これも嬉しい。

食事の後はマジックショー、そしてダンスタイム、カジノタイムへと進む。深夜には、レストランで夜食が提供され、小腹の空いた乗客には好評。筆者は、夜食はパスして、お気に入りのネプチューンバーで海事プレス社の若い記者と船談議を楽しんだ。

ちょうど冬型の気圧配置となって、風はかなりきつく、海面は波立っているが瀬戸内海の中では、波が大きくは成長できずに波長も短いので、全長166mの「にっぽん丸」ではほとんど船は揺れない。船酔いを心配しなくてよい瀬戸内海のクルーズには、船にかなり弱い女房も安心して乗船できるのも今回のクルーズの大きなメリットと言える。

翌日は、早朝のモーニングコーヒーとアスレチックから始まって、朝食、各種カルチャー教室、イベントと目白押し。筆者も、カルチャー企画の1つとして、シアターで「クルーズの歴史と楽しみ」についての講演を1時間行わせて頂いた。昼食の和食もなかなか美味しかった。

船は、三原沖などの瀬戸内海北部水路を通過しながらゆっくりとクルーズ。多島海の航海は変化があって楽しい。筆者は、大浴場で、瀬戸内海を眺めながらサウナとジャグジーでゆったりと体の休養。この大浴場は日本のクルーズ船ならではのものであろう。幸陽ドックでは建造中のAPLのコンテナ船などを眺めることができた。因島大橋をくぐり、来島海峡を抜けて、船は東にUターンする。

夕方からは、船長主催のカクテルパーティー、フルコースのフランス料理の豪華ク

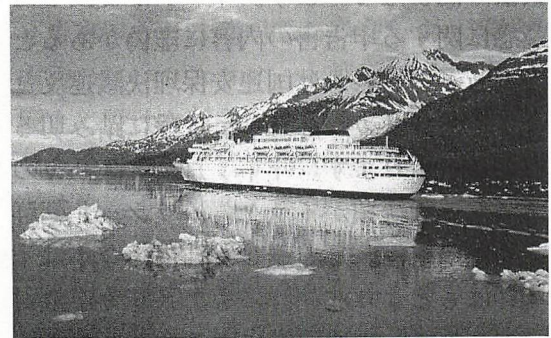
リスマスディナー、そして歌と踊りのレビューショーと続いた。

こ のサンタクルーズの料金は、2泊3日で7万円から。若干高めを感じるかもしれないが、移動、宿泊、すべての食事、モーニングコーヒーやアフタヌーンティなどの飲物、ショーやイベントへの参加を全て含んでの価格だから、その内容をよく吟味すると、他の国内旅行に比べて決して高くはない。そのレジャーとしてのコストパフォーマンスが、一度クルーズを体験すると、病みつきになる人が多い所以であろう。もう少し乗船率が上がり、船も大型化してたくさんの乗客を受け入れることができるようになれば、クルーズ料金も海外のクルーズ客船並に低下し、それによってクルーズ需要が増加するという良い循環ができて来るものと期待される。

さて、「にっぽん丸」は1月に船内を大改装して再デビューし、神戸起点のクルーズを2月から3月にかけて数回実施するという。これは筆者のように関西に住む船ファンにとっては絶好の機会である。3月3日神戸発着の3日間クルーズ、3月5日神戸発・博多着の3日間クルーズなどはなかなか魅力的だ。

また、同船は4月初旬からは3ヶ月にわたる世界一周クルーズに出航するが、地中海、カリブ・パナマ、アラスカクルーズなどに区間乗船が可能という。世界のクルーズのメッカと呼ばれる水域を、美味しい日本食を堪能しつつ、大浴場に浸かりながらクルーズするのもおつなものではなからう

か。いずれの区間も10日間程度とのこと。この機会に「にっぽん丸」のクルーズをぜひお楽しみいただきたい。クルーズに嵌まること請け合いである。



世界のクルーズ人口は1000万人となり、3兆円産業に成長した。そうした中で経済大国日本だけが取り残された状況にある。現在、20万人といわれる日本のクルーズ人口を100万人にし、新しい海事産業としてのクルーズを日本にも根付かせるのが、筆者の夢の1つである。需要創造型の新海事産業を育成することこそが、すべての海事産業の発展にとって必要不可欠なのだと思う。

